The Japanese Red Cross Society of Nursing Science

Vol.2, 2004.

NEWS LETTER

日本赤十字看護学会ニュースレター第２号　2004 年 12 月発行

【特 集】研究活動支援

イラン南東部地震の救護活動（日本赤十字社提供）

「（赤十字の理念について）人間の手の届く範囲でその実際的な解決を相互援助の方法で図ることを鼓舞する一つの理想なのである。
それは新しい宗教でもなければ、特別の哲学でもない。
それは全ての宗教とすべての哲学に当てはまる一つの態度である。」

J・ピクテ著「赤十字の諸原則」より

よりよい看護実践の探究を支援するために　～研究助成制度の設立～

学会では、平成 16 年度から研究助成制度を設立いたしました。その制度発足の中心となりました研究活動委員会の筒井委員長に制度についてお話を伺います。

インタビュアー）研究助成制度設立のねらいについてお話しいただけますか？

筒井委員長）日本赤十字看護学会の活動について、理事会で議論されましたときに、看護実践の研究をより支援する方向を考えていきたいと話し合われました。そこで、研究活動委員会として、何か活動できないかと考え、臨床の看護職の方々を応援できるような研究助成制度を設立することになりました。といいますのは、臨床の方々が研究を行いますときに、自費で切手を購入してアンケート調査をされたりですとか、そういう経済的な負担を負いながら研究をされていることが多いのです。ですから、この助成制度を活用して頂くことで、もっとやりたい研究ができる、例えば器具を購入したりですとか、そのような可能性がでてくることを期待して、助成制度を発足したのです。

イ）助成金額について、教えて頂けますか？

筒井委員長）60 万円です。一題につき、上限を 30 万円と考えまして２題という意味でこの金額になっています。２題というのは、臨床の会員と教育研究機関の会員の共同研究プロジェクトからひとつ、個人の研究プロジェクトからひとつと考えました。臨床の方々が応募されるときに、30 万円の予算では多すぎる、10 万円あればよいとお考えになるときには、５～ 10 万円からでも応募は受付けております。ですから、応募状況によっては、２題以上が採用されることもあります。

イ）お話を伺って、会員のみなさんが応募しやすいように対応されていると感じました。次に助成制度を活用した場合のスケジュールについて教えて頂けますか？

筒井委員長）平成 17 年度の研究助成の応募は、平成 17 年２月末まで受付しまして、３月に決定いたします。助成期間は、平成 17 年４月から平成 18 年３月末までとなります。詳細はホームページをご覧下さい。（http://jrcsns.umin.ne.jp）

イ）研究助成を受けた場合の義務というのは何かあるんでしょうか？

筒井委員長）助成制度を利用して頂くには、ふたつの義務があります。ひとつは、日赤看護学会学術集会での発表、ふたつめには、学会誌への投稿です。学会誌への投稿は、査読の結果によっては、不採用になるかもしれませんが、とにかく投稿して頂くようにしています。平成 17 年度に助成制度を活用される方には、このふたつを平成 19 年度までにして頂くことになります。

イ）投稿するということも、経験になるということなんですね。また、学会誌に収録されますと、より広く研究成果を広めることにもなりますね。

筒井委員長）掲載論文には、「本助成を受けて…」と記載されますので、読んだ方が、こういう研究に助成されたのだと知って、応募してくださるのではないかと思っています。

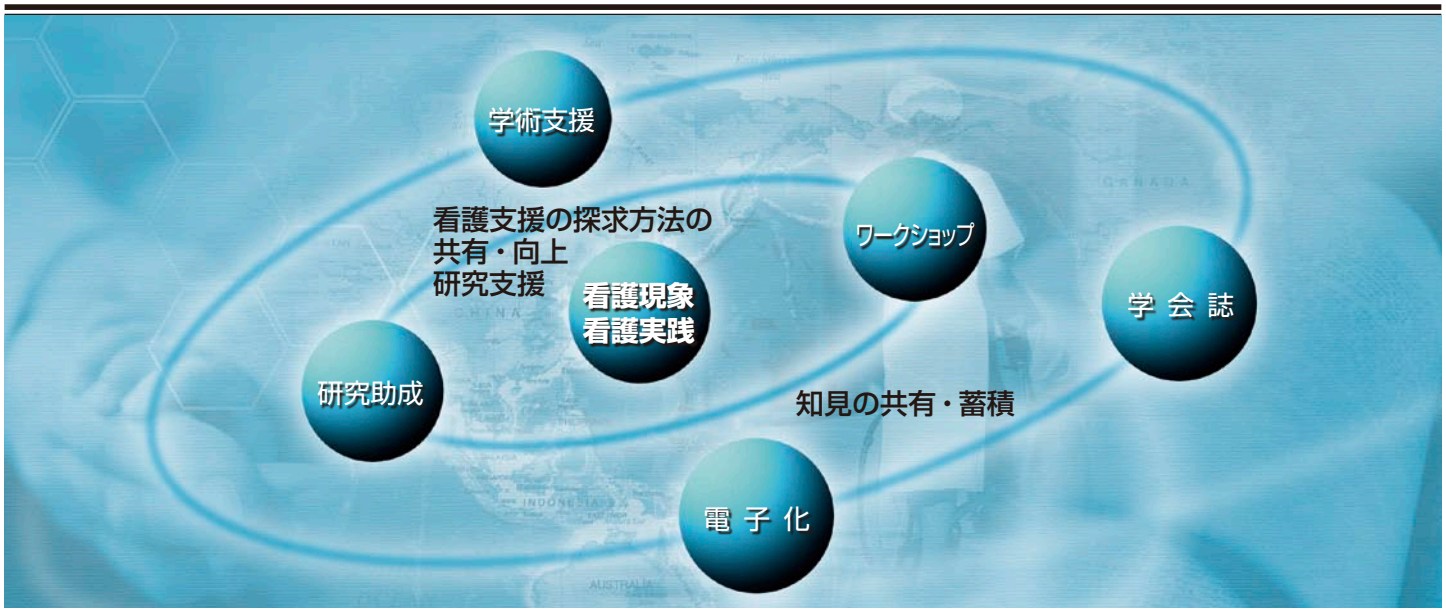
イ）どのような研究計画に助成をとお考えか、お聞かせくださいますか？

筒井委員長）ケアの向上につながるような研究であれば嬉しいと考えています。ですから、難しい研究でなくても構わないと考えています。発表をなさったときに、他の臨床現場のみなさんが、取り入れてみたいと思われるような研究をして頂けると、嬉しく思います。学会 HP には、応募記載例もあります。助成制度の選考委員一同は、臨床の方々を大事に育てようと思っておりますので、どうぞトライしてください。応募してくださることをお待ちしております。

! 助成制度 ── 耳寄り情報

応募資格は、研究代表者は２年以上の本学会員であることですが、共同研究者は助成申請時に学会の入会手続き中であれば申請が可能です。また、学会発表者１名の旅費を予算に申請することができます。研究を行っている皆さま、これからお考えのみなさま、どうぞ助成制度をご利用ください。

特集 研究活動支援



ワークショップ

研究活動コーナー「アンケートの作成方法」に参加して

深谷赤十字病院　柳原　妙子　中里　佳織

平成 16 年 6 月 4 日、5 日の 2 日間、東京台場にて開催された第 5 回日本赤十字看護学会学術集会に初めて参加し、研究発表を行ないました。1 年間の研究結果を学会という大きな場で発表できた事は大変意義のある事だと感じました。

アンケート作成方法の講演には、多くの参加者があり、部屋に入りきれないほどでした。皆、同じように難しさを感じているのと同時に、研究への意識の高さを感じました。

河口先生の講演は、質問紙のサンプルをもとに細かな部分まで話していただきました。研究を行なう上でまず「何を調べ、何を知りたいのか、しっかり計画すること」質問紙を作成するにあたり十分に時間をかけ検討しなければならない事を再確認しました。また、調査を依頼するにあたり対象者に研究を行う動機を明らかにし、依頼者のプライバシーの配慮や倫理面についても、サンプルをもとに説明され参考になりました。

研究というとやはり難しく考えてしまいますが、研究を進めていくうちにその中から多くの学びがあり、今後の看護実践に役に立てたいと思います。

ワークショップを開催して

研究活動委員会　筒井　真優美、池川　清子、江本　リナ

去る平成 16 年 6 月 5 日、第 5 回日本赤十字看護学会学術集会において、河口てる子氏を招いて「アンケートの作成方法」と題したワークショップを開催しました。

今回のワークショップでは、臨床研究で利用することが多いにもかかわらず、誰もがどういう風に作ったらいいんだろう？と立ち止まるアンケート作成に関して、アンケート内容の検討から設問の表現方法まで、具体例を挙げながら分かりやすく解説して下さいました。

会場からあふれるほどの約 75 名もの参加があり、関心の高いトピックであったことが伺えました。ご参加頂いた多くの方から有意義であったとの反響があり、皆さまの今後の研究活動に役立ててくださることを期待しております。

さて平成 17 年は、皆様の要望に応えて、アンケートの分析方法について再び河口氏を招き、第 6 回日本赤十字看護学会学術集会開催中に企画する予定でおります。ぜひご期待下さい。

会場で多くの皆さまにお会いできるのを楽しみにしております。

テーマセッション

「救護員としての赤十字看護師の目指すもの」に参加して

成田赤十字病院　石渡　祥子

今回の学術集会では、様々な場面で「災害看護」が語られていたことが印象深い。赤十字看護師の特色として、最も重要な部分であるにもかかわらず、今まで十分な取り組みがなされていなかった現状と課題について考えさせられた。

特に感じた点は２点である。まず、早急に災害看護学の構築が必要だということである。現状では、基礎教育における到達点が明確でないため、赤十字概論等とのダブりの部分も覚悟しながら救護看護師の養成を行っている。卒後教育としての救護看護師養成プログラムも、この点が明らかになると全国の赤十字施設の共有が図れるのではないかと思う。

２点目は、救護看護師養成プログラムの検討である。現在、本社から提示されているプログラムは、項目立てのみであり、内容は各施設まちまちである。特に、災害看護の内容、対象となる看護師の選定条件、教授方法（シュミレーションなどを取り入れたより実践的な訓練など）については、各施設が手探りで行っている事が意見交換で分かった。また、突発的に起こる災害に対して、日頃から心構えを持ち、技術や知識をさびさせないためには、継続的な研修を繰り返し行うことが必要で、この方法や回数についても各施設の取り組みに差があった。これらの点について、意見交換や共有化できる研修・会議などの実施も望まれる。

病院における災害救護の担当者として、救護看護師の育成だけではなく、国際救護派遣者の育成や派遣に際しての支援体制など今後の課題が明らかになり、有意義なセッションであった。

第５回 日本赤十字看護学会学術集会を開催して

第５回学術集会大会長・日本赤十字武蔵野短期大学　森　美智子

第５回日本赤十字看護学会に多勢の皆様にご参加頂きまして有り難うございます。ご講演・シンポジウム・テーマセッションの先生方、座長の皆様に感謝申し上げます。また、学会運営にあたり、本学学長を始め教職員・学生のボランテイアに支えられて終了することができ、心より御礼を申し上げます。

開催するに当たり、一番苦労した点は、会場が学内でないために赤字決算にならないように企画することでした。それは会員の皆様のニーズ分析、一般参加者へのアピールが最大の焦点でした。

時代はイラク爆撃など国際社会の変動も激しく、平和を希求する願いは強く、赤十字活動について関心が高い事が考えられ、企画の中心に据えたことでした。結果として、日本赤十字の救護活動について、国際社会でのあり方と将来展望・日常の看護活動のあり方と救護活動・赤十字看護教育のあり方と、三次元のあり方が必然的に、講演・シンポジウム・テーマセッションから導かれました。

参加者数は 667 人で、うち一般参加者数は 70 人でした。皆様のご参加のお陰を持ちまして、決算は 898,533 円の黒字で、日本赤十字看護学会の収入にすることができホッとしております。

演題数は 77 題でした。アンケート結果は、メーンテーマ「国際化時代における赤十字･看護･教育のチャレンジ」への興味は 92%にあり、各企画についても 86%以上の好評を頂き、ご満足頂けたのではないかと思いうれしく存じます。

最後に、本学会が益々発展されることを願っております。

学　会　誌

学会誌発行から、研究活動を支援しています

編集委員会委員長　黒田　裕子

編集委員会では、学会員の方々の研究成果や実践成果の公表の場として学会誌を活用して頂けるよう、平成 13 年３月発行の創刊号から第１期委員会が活動を始動しました。平成 15 年度には第２期委員会が活動を引き継ぎ、できるだけ質の高い論文を掲載させて頂けるよう、専任査読者制度を発足しました。この制度によって、学会誌の質の保持だけでなく、投稿者への教育的機能がより充実した査読となっています。

昨年度発行の第４巻第１号までに発表された論文は、原著論文２編、研究報告８編、資料

13 編、実践報告 4 編となりました。

編集委員会では、皆さまの実践や研究の成果が、学会誌に掲載されることで知の共有の一助になるよう今後も活動を続けてまいります。皆さまの積極的な投稿をお待ちしています。

電　子　化　電子化の取り組みから、研究活動を支援します

広報委員会委員長　川島みどり

平成 15 年度から始動した広報委員会では、学会の情報交流支援を目的に、大学病院医療情報ネットワーク上に学会ホームページ（以下 HP）を開設しました。この HP が会員間の交流や学術資源として、また一般の方々に学会活動をオープンにすることで赤十字看護に関する情報提供を行えるよう、活動を継続しています。

今年度は学術情報の有効活用を目指して、学会誌の電子化に取り組んでいます。これは、本学会の知見の蓄積と共有を、ネットワーク上でも可能にすることを目指しています。平成 16 年末には、一部の論文を HP 上で閲覧可能にいたしますので是非ご覧ください。皆さまの実践に関する意見交換や研究に関する会員間の情報交換など積極的にご利用頂けるよう活動を継続してまいります。本委員会へのご意見ご要望など、HP でお寄せ頂くのをお待ちしています。

INFORMATION

第６回 日本赤十字看護学会学術集会開催

第６回学術集会会長　小島　通代
（日本赤十字九州国際看護大学）

「21 世紀の赤十字看護の方向性を考える」をメインテーマに、第６回日本赤十字看護学会学術集会が開催されます。日時は、平成 17 年６月 10 日（金）、11 日（土）。場所は、福岡県宗像市に開学した日本赤十字九州国際看護大学です。皆さま、ぜひご参加くださいますようご挨拶申し上げます。

私どもをとりまく環境は 21 世紀に入り変化を加速させているようです。科学技術の進歩に伴う可能性の広がり、同時にその負の影響の発現、価値観の多様化、個人の確立の必要などが、社会生活のさまざまな場面においてこれまでとは異なる対応を私どもに求めます。その中にあって、第６回学術集会では、赤十字の看護を改めて問い、これからの方向性を探ることをテーマにいたします。心を開いて語り合いお互いに考えることこそが学術集会の良さです。対話の中で知恵が伝わる楽しさを味わっていただきたいと存じます。

プログラムは講演やシンポジウムと研究発表とが重ならないようにいたしました。皆さまが腰を据えてじっくり語り合える場になると思います。

第１日は、学術集会長基調講演 45 分、シンポジウム「今改めて問う　赤十字看護とは」２時間、研究発表２時間を行います。第２日は、テーマセッション１時間半、研究発表及び示説２時間、喜多悦子氏による特別講演「21 世紀の健康と看護」１時間半です。

テーマセッションは、テーマに関心のある参加者が集まって自由に討議を深めることをねらいにしています。現在５つのテーマを設定しています。（　）内はコーディネーターです。

（1）ネットワークを生かした人材育成と人材活用
　（秋吉　信子　大分赤十字病院）
（2）看護とカウンセリング
　（坂本　洋子　日本赤十字九州国際看護大学）
（3）大学と臨床の連携のあり方
　（山勢　善江　日本赤十字九州国際看護大学）
（4）地域とともにある看護
　（松尾　和枝　日本赤十字九州国際看護大学）
（5）災害看護
　（山本　捷子　日本赤十字九州国際看護大学）

研究発表の演題を募集しております。ご自身のテーマについて皆さんと話す絶好の機会です。せひ、ご応募下さい。

NEWS LETTER — The Japanese Red Cross Society of Nursing Science, Vol.2, 2004.
日本赤十字看護学会ニュースレター 第２号　2004 年 12 月発行

●発行　日本赤十字看護学会　広報委員会
〒150-0012
東京都渋谷区広尾 4-1-3　日本赤十字看護大学内
FAX 03-5485-5777
●学会ニュースレターは学会ホームページからダウンロードできます。
http://jrcsns.umin.ne.jp
●学会ニュースレターに関する皆様のご意見・ご感想をお待ちしています。
kawahara@redcross.ac.jp
t-tanaka@redcross.ac.jp までお願いします。

●編集後記

今年は自然災害や国際情勢の不安定さなどから、会員皆さまのそれぞれの現場で、赤十字としての活動を思慮し実践されていることと拝察します。ニュースレター第２号では、研究助成制度の発足をうけ、学会の研究活動支援を特集した発行となりました。学会やワークショップに参加された会員や主催者の声もお届けし、会員の皆さまが様々な学会の内容を身近に感じて頂ければ幸いです。

今後も、ニュースレターは年１回の発行予定で、学会からの情報発信、会員の声を紹介していきます。